

# 心よ



志村ふくみ

# FUKUMI SHIMURA

こころなんて言われるとあまりまともすぎて何を書いてよいかわからない。まともついでに、あまりにもまともな詩をひとつ。

心よ

八木重吉

こころよ

では いっておいで

しかし

また もどっておいでね

やっぱり

ここが いいのだけに

こころよ

では 行っておいで

しかしこれはちょっと怖い詩である。心が出ていたらどうなるのか。八木重吉のように、「ではいっておいで」などとは決して言えない。「行かないでくれ！」と叫ぶだろう。心がなくなった自分はどうなるのか。気が狂うにちがいない。「またもどっておいで」なん

て優しいことを言っではいられない。もうもどって来ないだろう、かけがえのない私の心よ、絶対にいかないでおくれ、と私は哀願するだろう。

この詩にはどこか春の風が吹いているようなおだやかな感じがあるが、それはちがう。時代のせいもあるかもしれないが、霊妙な哀しみがただよっている。詩人は肺を病み、妻子をのこして若くして亡くなっている。来るべき運命を静かに受容しようとしているかのようだ。現代の人間には決して持つことのできない諦観のようなものさえ感じる。

自分にむかって、「心よ」と呼びかけることのできる深い井戸をのぞきこむような潔い澄んだ思い。

この騒音のはげしい時代にそのような思いなど望むべくもない私たちに、優しいが鋭い矢をむけているともいえる。

もう一つこの詩人の詩を書きたいと思う。

霜

地はうつくしい気持をはりきって耐らえていた  
その気持を草にも花にも吐けなかつた  
とうとう肉をみせるようにはげしい霜をだした

心はここにいたのかもしれない。